大塚国際美術館の展示作品を撮影

幻になった 芦屋の《ひまわり》

問い合わせ　広報国際交流課　☎38-2006

７枚の《ひまわり》

ゴッホの《ひまわり》といえば、芸術に興味がない人でも知っている世界屈指の名画といっても過言ではないでしょう。日本で《ひまわり》と聞いて思い出されるのは、東京の「SOMPO美術館」に常設展示されている《ひまわり》。1987（昭和62）年に安田火災海上保険（現在の損保ジャパン）が巨額（約53億円）を投じて落札したことで話題になりました。

オランダ人の画家フィンセント・ファン・ゴッホ（1853～90年）は、1888～89年の２年間で色合いや本数が異なる花瓶にさされたひまわりを７枚描き、このうち６枚は、東京（SOMPO美術館）・ロンドン（ロンドン・ナショナル・ギャラリー）・アムステルダムの美術館などに所蔵されています。

では、残りの１枚はどこにいったのでしょう。

その所在を知るには、芦屋の大正時代まで遡ります。

大正時代の芦屋

大正時代に芦屋市は、まだ存在しませんでした。芦屋市が誕生したのは1940（昭和15）年11月10日、今月で市制施行80周年を迎えます。それまでの芦屋市域は、精道村と呼ばれていました。

大正時代の芦屋は、明治後半から昭和初期にかけて阪神電鉄・国鉄（現在JR西日本）・阪急電鉄や阪神国道（現在国道２号）などが開通し、大阪・神戸への交通が便利になり、インフラの整備や土地開発も進み住宅地として目覚ましい発展をとげます。

また、文化や芸術面でも「阪神間モダニズム」と呼ばれる洗練された地域文化が開花した時期でした。ヨドコウ迎賓館（旧山邑家住宅）に代表される名建築が数多く建てられました。近代的な生活様式が育まれ、吉原治良（前衛画家）や小出楢重（洋画家）など、芦屋ゆかりの芸術家たちが数々の芸術作品を世に生み出しました。

芦屋へ来た《ひまわり》

この大正時代の芦屋に、大阪で綿織物の会社を設立し財を成した山本顧彌太という優れた実業家がいました。彼は文化や芸術に強い関心を持っており、特に雑誌『白樺』の創刊や美術・文学活動を続けた武者小路実篤に傾倒し、彼の活動を熱心に支援していました。

そして、武者小路実篤らが建設を構想する白樺美術館のために、山本顧彌太は1919（大正８）年に、ゴッホの《ひまわり》を８万フラン（現在の約２億円）で購入しました。

その後、1923（大正12）年に発生した関東大震災による不況のため白樺美術館の設立は頓挫し、行き先を失った《ひまわり》は芦屋の山本邸の応接室に飾られることになります。

結局この《ひまわり》が日本で展示されたのは、1921（大正10）年の東京、1924（大正13）年の大阪で合わせてもわずか14日間だけでした。

初来日したロンドン・ナショナル・ギャラリー収蔵の４番目に描かれた「ひまわり」。南フランス・アルルで、共同生活を送るゴーギャンの寝室を飾るために描かれた作品。画面全体広がるに黄色の調和が際立っている。

フィンセント・ファン・ゴッホ《ひまわり》
1888年　油彩・カンヴァス　92.1×73cm
©The National Gallery, London. Bought, Courtauld Fund, 1924

新美術館棟へと移転したSOMPO美術館では、1987年の購入当時に大きな話題となった５番目に描かれ「ひまわり」が常設展示されている。この作品は上の４番目の作品（ロンドン・ナショナル・ギャラリー）を元に同じ構図で描かれている。

フィンセント・ファン・ゴッホ《ひまわり》
1888年　油彩・カンヴァス
100.5×76.5cm ＳＯＭＰＯ美術館

芦屋 大正時代の風景

寿劇場（大正10年）

大桝町に作られた赤レンガづくりのモダンな劇場。芝居や映画などを上演してにぎわったが、昭和25年に焼失した。

精道村役場（大正12年竣工）

当時は日本一の村役場といわれていた。

ヨドコウ迎賓館
（旧山邑家住宅）
竣工当時の様子

出典：『建築写真類聚』第５期第13（文化住宅 巻４）大正15年〔1926〕刊行

大正10年代の阪神芦屋駅付近